

学 位 論 文 要 旨

氏 名 金奎道 (キムギョド)

題 目 音楽科教育において異文化芸術を経験することの意義と指導方法に関する実践的研究

学位論文要旨 (和文2,000字又は英文1,000語程度)

本研究の目的は、異文化芸術を扱う音楽科学習において、その経験の意義と指導方法について教育実践学の立場から研究することによって、これからの学校音楽教育の改善につながる授業構成理論を提案することにある。

論文は、序論と結論を含む全8章で構成されている。

第1章では、カルチャー・ショック論にみる異文化体験による情動的反応と歴史的文献にみる西洋人が聴いたアジアの音楽に対する感じ方、聴き方の様相をまとめた。そこで、異文化と出会うときに起こりうる情動的反応は、自分の内在化している音楽的語法との相違によるものであると結論づけた。またその例証は、歴史的文献の記述からも確認することができた。

次に、J.デューイの芸術論から、異文化芸術を通して人間関係や社会関与の仕方を知るためには、その背景となる社会的・文化的・自然的・歴史的要因といった文化的側面をかかわらせることが有効になると導いた。そして、音楽科授業における直観的・共感的な方法として、パフォーマンスを通じた学習方法を採用することとした。

第2章では、異文化芸術の学習の様相を挙げた。ここでは、世界音楽のコンセプトに基づく音楽教育と多文化音楽教育のコンセプトに基づく音楽教育に焦点を当て、指導方法をまとめた。この二つのコンセプトにおける教育のねらいはそれぞれ異なるものの、異文化芸術を扱うことに絞って考えると、音楽文化の特殊性と普遍性を知ることによって価値づけている。そして、その方法は、社会的・文化的脈絡の理解を重視し、五感を通じた学習、他教科と関連づけた学習、表現と鑑賞を統合した学習など積極的に音楽と関わらせることが挙げられた。

第3章では、本研究における異文化芸術の学習の教材としては韓国の民俗芸能カンカンソーレを取り上げた。その理由は、カンカンソーレは文化財としての価値が認められていること、さらに、韓国の昔の生活様式及び風土を知ることによって適していると考えられるからである。要するに、無形文化財としてのカンカンソーレの価値を見直し、音楽的特徴をリズム、音階、形式、歌詞の観点から分析した。そして、自国の小学校の音楽科教科書に示されているカンカンソーレの指導内容を抽出し、音楽科の指導内容の4側面から捉え直すことで、カンカンソーレが生まれた背景や歌われる歌詞の意味、また風土や歴史といった文化的側面を取り上げることが必要であるとまとめた。その結果から異文化芸術の教材としての可能性を考察した。

第4章では、カンカンソーレを異文化芸術の教材とし、日本の中学生を対象とした研究授業を筆者が計画・実施・分析した。教師による文化的側面の提示の仕方とそれをどう受容したのかについて生徒の反応を分析した結果、異文化を体験するパフォーマンスの意味付けには音楽の背景となる人間の生活様式や生活感情と結び付けて提示することが有効であることを明らかにした。

第5章では、既存の音楽的語法との不一致度が高い異文化芸術の特徴から、①教師と生徒とのずれと②生徒と教材とのずれを視点とし、実践分析を行った。その結果、曲想・イメージと演奏の表現内容とのずれ、表現（歌い方）と音楽の法則性とのずれ、言語と音楽との相関性のずれが存在することを明らかにした。分析結果より導き出されたずれの様相を根拠として、異文化芸術の学習の特性について次の2点にまとめた。それは、①異文化芸術の学習は、その文化的背景を理解することによって成立する、②異文化芸術の学習では、ずれの気づきからずれの解消までのプロセスが意味をもつ、ことである。

第6章では、自文化を立脚点とする異文化芸術の学習を構想し、異文化の学習のレディネスとして自文化の学習を位置づけ、相互の音楽文化を関連付けた授業構成を通して、生徒の音楽的経験の変容過程を明らかにした。それを、民謡に対する概念の会得と民謡の重要な表現要素である小節（こぶし）の受容過程に焦点を当て、分析した。まとめとして、自文化の音楽の特質を意識化した上、それを判断の基準に異文化芸術が学習できるためには、自文化と異文化の学習における効果的な授業構成について発展的に構築していく必要があるとした。

以下のように本研究をまとめることができる。

生徒はカンカンソーレを通して、韓国の昔の生活様式と土地の人々の生活感情を理解することができた。それが、異文化芸術を経験することの意味の一つといえる。そして異文化芸術を学ぶことの意義は、歌うことができる、楽器を演奏することができる、といった技能習得ではなく、音楽とは何かを考えさせる機会をもたらすことにある。すなわち、異文化芸術を学習することによって、音楽文化の普遍性を知ること、異なる芸術の特殊性を認めることで、音楽観の拡大につながるのである。

そして、異文化芸術の学習では、直観的・共感的な方法であるパフォーマンスを取り入れ、文化的側面を関連づけることが効果的に働く。ずれの気づきからずれの解消までのプロセスが意味をもつ。自文化の音楽の特質が意識化され、かつそれが判断の基準になることによって学習の可能性が広がると考える。